



説教要旨「祈りを合わせ、心を合わせ」

使徒言行録 1 章 12～26 節

十二使徒の一人でありながらイエス様を裏切り、逮捕する者たちの手引きをしたイスカリオテのユダは、裏切りによって得た金で買った土地にまっさかさまに落ちて、悲惨な最期を遂げたと伝えられています。このことを語ったペトロは、それが当然の報いであるなどとは考えていませんでした。イエス様見捨てたという意味でペトロもユダ同様に裏切り者です。

ところがユダは悲惨な最期を遂げ、ペトロはこのように、聖霊によって使徒として遣わされようとしています。ユダとペトロ、この二人の裏切り者の命運を分けた“違い”は、祈りを合わせる仲間の有無だったのではないのでしょうか。ユダは孤独であり、ペトロには共に祈る仲間がいたのです。

ユダがもし、他の弟子たちと共に復活されたイエス様に出会っていたならば、使徒の一人として遣わされていたかもしれません。しかし、ユダは他の弟子たちに対しても大きな負い目を感じていたことでしょう。彼はほかの弟子たちと一緒に祈ることが出来なかったのです。逆に言えば、ペトロやほかの弟子たちにしても、もし一緒に祈りをあわせる仲間がなく、孤独であったなら、罪の重さに耐えられなかったことも考えられるのです。

きっとペトロは、このユダの悲惨な死を、「いい気味だ」などと思えなかったでしょう。むしろ、ユダと一緒に祈ることができなかったことを悔やんでいたのではないかと思うのです。

ユダの死によって、十二使徒には一人の欠員がでました。その欠員を補充のため、おそらくそこに集う百二十人から多く支持を集めた二人が選びだされ、最終的には人間の意図の介入しないくじという形で、つまり最後の決断を神様に委ねる形で、マティアが選出されました。

それは彼がこれから担う努めの責任を、この兄弟姉妹らが共に担うことであり、ほかの誰でもない神様がその責任を最終的に担ってくださることを意味します。このような兄弟姉妹の心を合わせての祈りによって、教会は歩みだすのです。

(2021・6・13 説教者：稲垣真実)